

(抄録)

研究課題名：抑制反応に影響を及ぼす生活関連要因の解明

研究代表者名：鹿野晶子

【目的】本研究の目的は、go/no-go 課題における抑制反応に影響を及ぼす生活関連要因を解明することとした。【方法】対象は2021年度に東京都内の公立A小学校に在籍する1~2年生161名（男子80名，女子81名）であり，調査は2021年11月の行事や特別な活動がない平日の午前中に実施された。本研究では，視覚刺激によるgo/no-go 課題に対する把握運動反応のデータ，3軸加速度計（Active style PRO HJA-750C，オムロンヘルスケア社製）による平日の1日総歩数のデータ，質問紙による平日のスクリーンタイム（テレビ視聴時間と電子機器使用時間の合計）と睡眠時間のデータが収集された。分析では，分化実験における陽性刺激（go task）に対する反応時間（以下，「分化RT」）に注目して，分化RTの性差，学年差を繰り返しのない二元配置分散分析（性要因，学年要因）によって比較した。さらに，分化RTを目的変数，性，学年，1日総歩数，スクリーンタイム，睡眠時間を説明変数とする重回帰分析（強制投入法）を用いて，分化RTと関連する生活要因を検討した。【結果および考察】二元配置分散分析の結果，「性×学年」の交互作用は認められず，男女とも小学1年生から2年生にかけてその値が減少していく推移が確認された。また，重回帰分析の結果，「1日総歩数」（ $\beta=0.317$ ）が有意な変数として抽出され，日頃の身体活動量が多い者ほど陽性刺激への反応時間が遅い様子が確認された。このような結果は，go/no-go 課題における抑制反応には日頃の身体活動量に影響を及ぼしている可能性を示唆している。しかしながら，本研究で示した重回帰分析の結果における決定係数が0.078と極めて低い点は，結果の解釈において留意すべきであると考えられる。このような結果には，対象数が少ないことが影響しているものと考えられる。したがって，対象とする年齢段階を拡大させてその数を増やしながら，抑制反応に影響を及ぼす生活関連要因を解明していくことを引き続きの課題として提起しておきたい。